

# 研究紀要

## 第29号

- |  |  |
|--|--|
| 奥東京湾東岸地域における関山・黒浜式期の貝塚                   | 古谷 渉                                     |
| 磨製石斧の材料と加熱処理(2)                          | 大屋 道則                                    |
| 川越田遺跡の手握ね土器と祭祀(3)                        | 福田 聖<br>赤熊 浩一<br>岡本 千里<br>澤口 美穂<br>大屋 道則 |
| 埼玉県の新輪棺墓                                 | 宮村 誠二                                    |
| 埼玉県における横穴式石室の石材加工について                    | 青木 弘                                     |
| 埼玉県における古代火葬墓—武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に—         | 西田真由子                                    |
| 常陸国南部における古代寺院の展開<br>—国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方— | 梶間 孝志<br>宮原 正樹                           |
| 武蔵型板碑における種子規模の変遷について                     | 砂生 智江                                    |
| 「毛塚の石仏」と初発期陽刻圖像板碑                        | 村山 卓                                     |

2015

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第1号住居跡貝層検出状況(南から)



5 「ヌ」グリッドコア4 45層(焼貝層)



2 「ネ」グリッドピット6検出状況(東から)



6 「ヒ」グリッドコア5 焼土・焼貝層断面



3 「ヌ」グリッドコア4 貝層、焼土・焼貝層断面



7 ピット5貝層検出状況

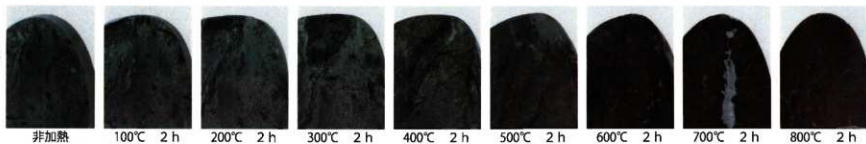


4 「ヌ」グリッドコア4 44層(焼土層)、87a層(焼土・焼貝層)

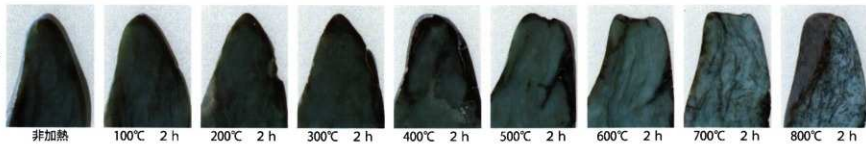


8 ピット5断面

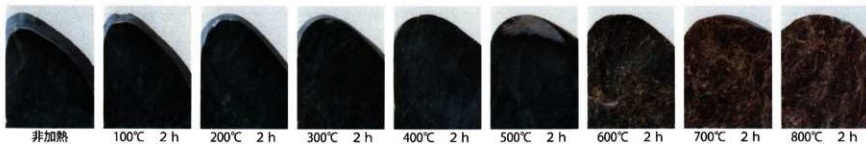
資料  
1



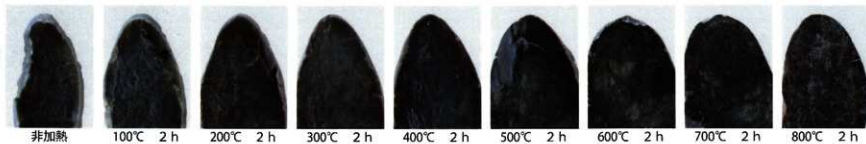
資料  
2



資料  
3

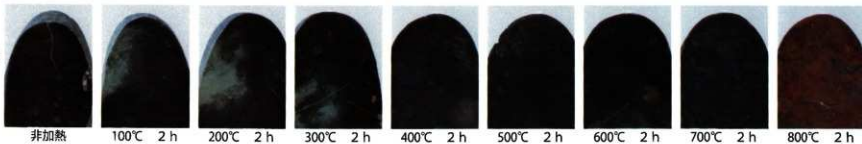


資料  
4

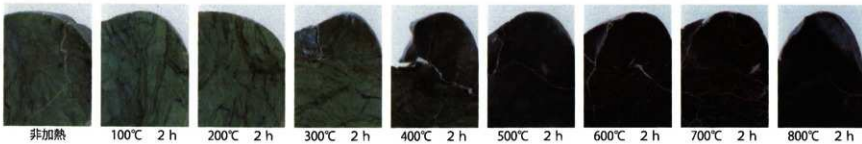


卷頭圖版 3 (大屋)

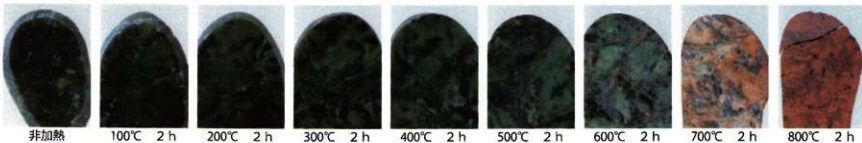
資料  
5



資料  
6



資料  
7





1 東松山市 毛塚の石仏 (全景)



2 東松山市 毛塚の石仏 (側面)



3 東松山市 毛塚の石仏 (部分)



2 川島町 長楽の石仏 (部分)

# 目次

巻頭図版

序

- 奥東京湾東岸地域における関山・黒浜式期の貝塚…………… 古谷 涉 (1)
- 磨製石斧の材料と加熱処理 (2)…………… 大屋道則 (17)
- 川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀 (3)…………… 福田 聖  
赤熊浩一  
岡本千里  
澤口美穂  
大屋道則 (19)
- 埼玉県の埴輪棺墓…………… 宮村誠二 (37)
- 埼玉県における横穴式石室の石材加工について…………… 青木 弘 (51)
- 埼玉県における古代火葬墓 - 武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に -  
…………… 西田真由子 (81)
- 常陸国南部における古代寺院の展開 - 国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方 -  
…………… 昼間孝志  
宮原正樹 (91)
- 武蔵型板碑における種子規模の変遷について…………… 砂生智江 (109)
- 「毛塚の石仏」と初発期陽刻画像板碑…………… 村山 卓 (123)

# 埼玉県における古代火葬墓

## — 武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に —

西田真由子

**要旨** 埼玉県内の火葬墓を蔵骨器や蔵骨器の蓋、埋葬施設の3項目について分類を行い、県内の火葬墓の地域性を整理し、地域における火葬の導入について検討した。北武蔵では8世紀中頃に火葬墓の導入期とし、8世紀後半から9世紀にかけてが展開期とすることができる。導入期は短頸壺を蔵骨器とする火葬墓が各地域で見られ、展開期は東側の地域は土師器を蔵骨器とし、西側の地域は須恵器を蔵骨器とする傾向がある。さらには武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓に特徴的にみられる土器被覆の火葬墓について他地域の例と比較した。

### はじめに

古代の墳墓は火葬墓・土坑墓・合口甕棺墓・古墳を再利用したものなどがみられ、地域や時期により各墳墓の盛行した時期が異なることで知られる。本論では埼玉県(北武蔵および下総国の一部)の火葬墓に焦点を当て、県内の各火葬墓が持つ要素を分類し、各小地域や遺跡での火葬の導入について検討するとともに、火葬墓の密集地域である川口市域の火葬墓について、他地域との比較からその性格を探り基礎的研究としたい。

### 1. 火葬墓の分類

分析では蔵骨器・蓋・埋葬施設の3項目に着目し分類を行い、年代・地域別の特徴を捉えてゆきたい。

なお、本論で扱う火葬墓とは火葬骨が収められ容器や土坑内に納められたものを火葬墓とする。基本的な考え方は小林義孝の「火葬墓の分析的視覚」による定義に従うものとする(小林1999)。

#### 1-1. 蔵骨器の身部の材質および器種分類

蔵骨器は灰釉陶器・須恵器・土師器が採用されている。蔵骨器の材質は、火葬墓の被葬者の身分差、その地域の土器の流通状況や、造墓集団の嗜好を表していると考えられる。

蔵骨器の材質および器種を分類したものは以下の通りとなる(第1図)。

#### A類 須恵器短頸壺

8世紀中頃の葉壺形の短頸壺は、鳩山町瓦山出土の蔵骨器や川越市鯨井新田出土のものがあげられる。そのほか川口市吹原遺跡、9世紀前半の同市赤山陣屋跡遺跡で出土している。

#### B類 灰釉陶器短頸壺

1例のみの出土で、富士見市八王子富士塚で発見されている。9世紀初頭から中頃である。

#### C類 須恵器甕

嵐山町越畑城跡跡・鳩山町大平遺跡等で出土している。8世紀後半から登場する。

#### D類 須恵器壺

東松山市物見山遺跡では底部穿孔がなされた丸底の壺が出土しているほか、富士見市松山遺跡で例がある。8世紀後半から現れる。

#### E類 須恵器長頸壺

さいたま市・川口市・春日部市域で出土している。8世紀前半から登場する。これらの器種を採用する火葬墓では春日部市浜川戸遺跡を除き頸部が打ち欠かれている。

#### F類 土師器甕

8世紀前半から登場するが、主体となる時代は8世紀後半から9世紀代で、武蔵型甕を蔵骨器とする。東松山市東山遺跡、川口市吹原遺跡、同市安行吉岡立ノ崎遺跡、同市赤山陣屋跡遺跡で出土している。

### G類 フラスコ瓶・提瓶

行田市で火葬骨が詰められた7世紀代の横瓶が出土している。埋葬施設については不明である。

転用して蔵骨器とし利用されてもおおしくない年代のものであるため、分類に加えた。

### H類 蔵骨器なし

火葬骨を布袋などの有機物に入れているか、土坑内に直接火葬骨を納めているものである。

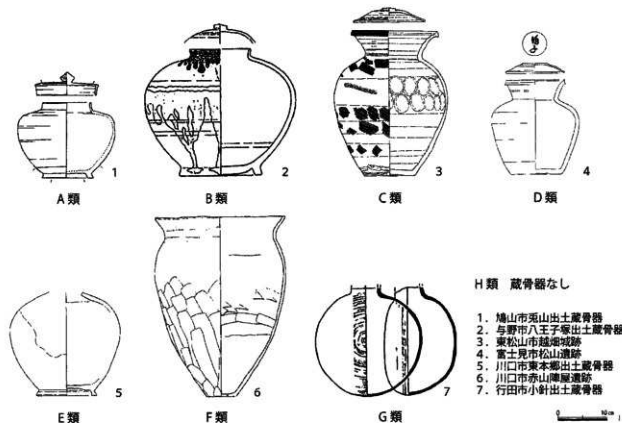
確実な事例としては川口市叭原遺跡3号墓があげられる。3号墓は土坑内に炭化物が集中する箇所があり、下面に蓋だけが置かれた状況で出土している。また、鳩ヶ谷市三ツ和遺跡では特殊土坑という名称で報告されている4基の土坑がある。火葬骨が土坑内に散り、複数の土器が破砕された状況で出土している。同様の例が叭原遺跡でも検出されており、「散骨タイプ」の火葬墓であるという意見がある(春日2000)。茶毘跡に残った火葬骨や炭化物などをまとめて土坑内に入れた遺

構である可能性も考えられ、火葬墓であるかどうかについても検討する余地がある。

### 1-2. 蔵骨器の蓋・外容器の有無

埼玉県内の蔵骨器の蓋や外容器は多様性に富んでおり、その複雑さは火葬墓に関する儀礼の結果の表れともいえる。ここでは、蓋や覆具について分類した。分類に際しては1類の蓋なし・2類の蓋・3類の土器被覆・4類の外容器の4つの項目に分けている。各項目の分類基準は以下の通りである。

1類の蓋とは土器の器種構成における「蓋」を指すのではなく、火葬骨を納めた身部に対し封をする役割を持つものに対し蓋と呼ぶ。2類の土器被覆とは、蔵骨器に土器を被せるもので蔵骨器を入れる外容器とは区別した。蓋との違いは、蔵骨器の身部の口縁部に対して2倍以上の大きさを持つものとした。3類の外容器とは、火葬骨の入った蔵骨器を入れる容器の事で、入れ子になるもの



第1図 蔵骨器の分類



とした。

なお、火葬墓の残存状況が悪く、蓋の有無がわからない事例と、出土状況からみて副葬品と考えられる土器は除外した（削平を受けて蓋や覆の有無がわからないものは※をつけている）。

#### 1-① 蓋なし

蓋を持たない火葬墓である。傾向としては蔵骨器を倒立させた火葬墓のほか、蔵骨器を持たない火葬墓に多い。布や革等の有機物の封がなされていた可能性も考えられるが、県内ではその痕跡が確認できた事例はない。

#### 1-② 蓋なし+土器被覆

蓋はないが、土師器甕の胴部上半を打ち欠いたもので土器被覆をしている。

#### 1-③ 蓋なし+土器被覆（二重）

胴部上半を打ち欠いた土師器甕を二重重ねて覆いとするものである。

#### 1-④ 蓋なし+甕

土器被覆とは異なり、1-④は完形の甕を逆さにして蔵骨器の口縁部にのせるものである。

#### 2-① 蓋のみ

須恵器蓋や坏でもって蔵骨器の肩部を封口するものである。蓋と身がセットとして作られているものと、別々に作った蓋と身を組み合わせるものがある。前者はA類に認められ、後者はA～F類に認められる。坏が蔵骨器の肩部内に納められているものもあるため、2-③類とは区別した。

#### 2-② 蓋（須恵器蓋）+坏

蓋となる土器と、須恵器坏をもって蓋としているものである。蔵骨器の肩部の口縁部に蓋と坏の組み合わせが最も多く、他には盤を蓋としている深谷市宮林遺跡例が確認されている。

#### 2-③ 蓋が2点以上

蓋を2点以上重ねて埋納するもので、須恵器蓋で封をする川口市叭原遺跡6号墓例がある。

#### 2-④ 蓋+土器被覆

須恵器蓋で蔵骨器身を封をし、胴部上半を打ち欠いた土師器甕を被せるものである。

#### 2-⑤ 蓋+甕

2-②と同じく土師器甕を利用するが、完形の甕を肩部に乗せているものである。

#### 3 蓋+外容器

川越市鯨井新田出土の蔵骨器と、川口市赤山陣屋遺跡で出土している。2例ともA類の短頸壺を蔵骨器とする。鯨井新田の例は須恵器鉢と胴部上半を欠損した須恵器甕を組み合わせ蔵骨器とする。

他の火葬墓の被葬者よりも、比較的優位な立場にある被葬者が採用していたと考えられる組み合わせである。

#### 1-3. 埋葬施設

##### i 柩を有するもの

蔵骨器の周囲を板石で囲む本庄市寺山遺跡例、玉石を周囲に巡らせたとされる川越市鯨井新田例がそれぞれ1例ある。詳しい出土状況の記録はない。

##### ii 土坑

円形の土坑内に蔵骨器を納めるものである。土坑にもパターンがあり、土坑を掘った後に、底面に土を充填し蔵骨器を据えているものと、蔵骨器をある程度まで埋めて据えるものがある。宮林遺跡例は蔵骨器を半分ほど埋め鉄板を土中に挿しているが、蔵骨器が半地中にある状態で儀礼を行ったのであろう。

また、木炭を覆土中を含むものもあるが所謂木炭柩とは言える程の木炭を含まないものが多い。春日部市浜川戸遺跡では土坑の壁面が焼けており、焼骨を蔵骨器へ入れた後、その場に埋納したものと考えられる。鳩ヶ谷市三ツ和遺跡例のように蔵骨器を持たないとされる火葬墓は土坑の壁が焼けているものみられる。

##### iii 古墳の再利用

東松山市代正寺遺跡の1例のみである。石室内

の出土ではなく周溝覆土中から火葬骨の入った蔵骨器が出土した。

#### 1-4. 火葬墓の分布

県内の火葬墓は、管見にふれる限り 33 遺跡と、同じ武蔵国であった南武蔵と比較すると決して多い遺跡数ではない。しかしながら地域ごと火葬墓のありかたに違いがみられ、ある程度のまとまりとして捉えることが可能である。先述の分類をふまえて地域別に整理したい(第2図)。

#### A 北武蔵台地・本庄台地・妻沼低地

##### (火葬墓散在地域)

蔵骨器の器種・材質ともに共通性がなく、散在している。

深谷市宮林遺跡は、8世紀後半の展開期の火葬墓にあたる。鉄板が出土しており、南武蔵と共通する点がある。D類の壺を蔵骨器としている。8世紀後半の深谷市皿沼西遺跡はF類土師器甕を蔵骨器とする。行田市内ではG類が出土している。

#### イ 比企丘陵～岩殿丘陵

岩殿丘陵出土の火葬墓は8世紀代の苑山出土蔵骨器をはじめとし、その後は南比企産の須恵器甕や壺を蔵骨器とし、須恵器を蔵骨器とする傾向が

強い地域である。

児沢北遺跡や大平遺跡・物見山遺跡では火葬墓が9世紀に展開する。この地域の火葬墓は丘陵上の先端部ごとに各火葬墓が占地し、蔵骨器の器種や蓋の組み合わせも等質的である。

渡辺一によれば物見山遺跡周辺で仏教遺物が出土した竪穴住居が発見されており、火葬墓も竪穴住居に関連した集団のものと考えている。(渡辺2006)。例外として熊谷市東山遺跡のようにF類の土師器甕を蔵骨器とする遺跡も存在する。この火葬墓群は古墳群内に造墓されており、1世紀以上の間隔が開くが、古墳群の被葬者との関連をどう捉えるか問題である。

#### ウ 入間台地～川越台地

富士見市松山遺跡ではD類が出土している。ふじみ野市鶴ヶ舞遺跡でA類、川越市鯨井新田のA類の短頸壺を蔵骨器とする火葬墓等がみつまっている。出土例は少ないが須恵器を蔵骨器として採用する傾向にある地域である。

#### エ 大宮台地・中川低地

川口市城およびさいたま市城は8世紀後半以降の火葬墓が展開する地域である。さいたま市城で



第2図 火葬墓の分布

は、E類の蔵骨器が単独で発見されている。川口市域では叭原遺跡と赤山陣屋遺跡のそれぞれが火葬墓群としてまとまっている。その他、宝泉寺遺跡等、群として捉えることが可能な遺跡もあるが、詳細は不明である。

中川低地に位置する遺跡は春日部市浜川戸遺跡のみである。旧国でいう下総国に属する。8世紀前半にF類の土師器甕を倒立させて埋納したものに、2-①にあたる土師器甕をのせて蓋としている。8世紀中頃にはD類の須恵器壺を蔵骨器とするものは甕を伴っており、出土状況がはっきりとしないが2-③にあたる可能性がある。

ア～エの地域の火葬墓のありかたを比較すると、西よりのイの地域はC類の須恵器甕、D類の須恵器壺が多くを占めるのに対し、東よりのエの地域では、A類の須恵器短頸壺・E類の須恵器長頸壺・F類の土師器甕が好んで使用される。また、西寄りの地域は蓋の分類でいう2-①や2-②の組み合わせが優位であるが、東よりのカの地域では、蓋を複数伴うものや1-②・1-③・2-③など、土器被覆の火葬墓がみられ、東寄りの地域

ではみられないものである。材質でも差異があるほか、蓋の組み合わせにも差異が認められることが指摘でき、各造墓集団の蔵骨器の材質の嗜好性や儀礼の違いを物語っている。

## 2. 火葬墓の導入期と展開期

1では地域ごとの特徴をまとめたが、埼玉県内で地域性が如実にあらわれることがわかった。2では、埼玉県内の火葬墓の導入と展開について考察をおこないたい。

### 2-1. 導入期の火葬墓

火葬の風習がどこから取り入れられたのか考える際にまず先に考えられるのは、畿内地域からの影響である。関東の石櫃をもつ火葬墓について論じた小林義孝は火葬墓の受容について典型的な火葬墓が畿内地域から各地域に導入され、下位階級に導入される過程で在地化し、バラエティーに富んだ火葬墓が登場するとした（小林 2000）。

畿内地域と他地域の火葬墓について比較がなされた先行研究としては、小田祐樹による大和・河内国の火葬墓と北部九州の火葬墓を比較検討した研究があげられる。北部九州では、壺蓋形の短頸

	A 群					B 群	C 群
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
I 類							
II 類							
III 類							
IV 類							

須恵器短頸壺の受容型 (A)よりA群の須恵器短頸壺をもつ火葬墓の導入期を推定する。A群の須恵器短頸壺をもつ火葬墓の導入期を推定する。

第3図 川口市叭原遺跡火葬墓の変遷（春日 2000 を引用）

壺を土坑内に入れるものが時期的に古く、各地で共通した様相を示している。このことから共通の外的要因により導入された可能性が高いとしており、僧侶の介在を想定した（小田 2011）。

それでは県内ではどのような状況であったのであろうか。火葬墓の構造について項目ごとに分類を試みたが、世紀単位では時期がわかるが、細かく時期決定しにくい例があるという問題点がある。時期がわかるものでは、F 類の 8 世紀前半の春日部市浜川戸遺跡の E 類、そのほかの北武蔵の地域では A 類の須恵器短頸壺が 8 世紀中頃から後半にかけて各地で登場する。続いて 8 世紀後半以降となると C 類～G 類が登場するというおおよその傾向がつかめる。

北武蔵では 8 世紀中頃を導入期とし、8 世紀後半～9 世紀前半以降を展開期とすることができる。さらに細分するならば、イの地域では 8 世紀中頃が導入期で、エの地域では春日部市浜川戸遺跡は 8 世紀前半、大宮台地の遺跡が 8 世紀後半となる。

アの火葬墓散在地域以外のイ～カの小地域では、A 類の短頸壺が出土しており、年代的に他の火葬墓よりも先行する。このことから、いささか乱暴ではあるが、北部九州のように火葬導入の契機となる火葬墓として、A 類を蔵骨器とする火葬墓が造墓されたのではないかと考えられる。

先述の通り川越市鯨井新田出土の蔵骨器や、川口市赤山陣屋跡の 12 次調査 1 号墓では外容器を伴っており、後代の火葬墓よりも優位性が認められる。この葬法の類型を上位の階級が取り入れ広まったものと考えられる。

ただこれを裏付けるには、同一の群内に A 類がみつからない場合は別の造墓集団、異なる立地の火葬墓同士の関係を証明しなければいけない。

また、春日部市浜川戸遺跡の F 類は、A 類の登場よりも古いのが、北山峰生による火葬墓の研究で

は、奈良県内ではすでに金属製蔵骨器、石櫃、葉壺形短頸壺、土師器等の転用蔵骨器は 8 世紀前半には全て揃うという（北山 2008）。これをふまえると、浜川戸遺跡では短頸壺以外の E 類を取り入れたのであろう。他地域とは違う様相を示している。北部九州では導入に際しては斉一性があるが、埼玉県内ではそれが言い切れない状況にある。

## 2-2. 展開期の火葬墓について

武蔵型壺を蔵骨器とする火葬墓を中心に展開期になると、各小地域では A 類以外の火葬墓が増加する。導入の契機となった火葬墓との材質や蓋の種類の差をどのように理解してゆけばよいか問題となるところである。

火葬の展開について検討するにあたり、資料が比較的揃うエの地域に焦点を当てたい。

エの地域で特に注目したいのは川口市吹原遺跡で、8 世紀後半から 10 世紀前後までの火葬墓 21 基が出土した火葬墓群である。第 3 図は春日部市の吹原遺跡の火葬墓の変遷図を引用し掲載している。I 期が 8 世紀後半で、II 期が 9 世紀前半、III 期は 9 世紀後半、IV 期は 10 世紀前後となる。I 期の 8 世紀後半に A-2-③・F-2-①・H-1-①が登場し、II 期の 9 世紀には土器被覆が登場し群内での火葬墓のバリエーションが一気に増えるのがわかる。この類型に着目し、I で述べた土器被覆の定義に基づいて関東地域で類例を求め、展開期の火葬墓について考察したい。

土器被覆は、南武蔵、千葉県北部の下総国域、茨城県南部に位置する霞ヶ浦周辺といった一部の限られた地域で確認されている。表は土器被覆の蔵骨器が出土した遺跡内での蓋の内訳である（第 1～3 表）。共通性を見出すために埼玉県内での蓋の分類に当てはめ提示した。以下、各 3 地域を概観する。

南武蔵にあたる東京都と神奈川県の一部の地域では、有間川流域や鶴見川流域に火葬墓が集中している。埼玉県のエの地域のように、土師器壺を

第1表 東京都・神奈川県（武蔵国域）における土器被覆の火葬墓

遺跡名	所在地	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
大塚遺跡	八王子市大塚										1
上野田遺跡・下野田遺跡	鎌倉市有馬	3									1
南山坂東谷遺跡	川崎市麻生区千代ヶ丘	3									1
平風丸山遺跡	川崎市宮前区平										1
有馬1丁目3号出土燧骨器	川崎市宮前区有馬										1
有馬2丁目0号出土燧骨器	川崎市宮前区有馬										1
石原遺跡	横浜市鶴見区東片町									1	1
御殿林遺跡	横浜市磯子区谷区										1

第2表 千葉県（下総国域）における土器被覆の火葬墓

遺跡名	所在地	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
あじき台遺跡	印旛郡栄町五斗原			1	1							3
五斗少遺跡	印旛郡栄町龍角寺五斗少									1		1
五斗少遺跡南地点	印旛郡栄町龍角寺五斗少							1	7			2
古込遺跡	富津市七兵衛止込										1	
杉子塚子台遺跡	香取郡多古町水戸字塚子台											2
長形遺跡	香取郡多古町水戸字長形									1		
土持台遺跡	香取郡多古町水戸字土持台									1		1

第3表 茨城県における土器被覆の火葬墓

遺跡名	所在地	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
蟹ノ内遺跡	ひたちなか市蟹ノ内											1
手取町出土燧骨器	土浦市手取町											1
前谷東遺跡	土浦市前谷町											1
東原遺跡	土浦市山形町											1
八幡基遺跡	土浦市浮留町	1										1
石籠型遺跡	土浦市浮留町											1
石籠北遺跡	土浦市浮留町											1
民草遺跡	土浦市浮留町											3
神島牧遺跡	稲敷郡鹿野村牧本											1
野原出土燧骨器	行方市野原											1
古堂遺跡	勝城郡八千代町栗山											1

蔵骨器とするものが多く発見されている。

土器被覆の火葬墓は比較的川崎市域で多く確認されている。集中して確認できる例は細山坂東谷遺跡のみであり、他の遺跡では同一群内に1点程度の出土となる。これらの土器被覆は蓋を伴わない1-②に偏る。なお、細山坂東谷遺跡では1号墓は地下式坑に納められ、副葬品に鉄板を伴う(戸田1987)。

千葉県の下総国域にあたる地域のうち印旛郡と香取郡内で土器被覆の火葬墓が確認されている。

土師器壺を蔵骨器とするものが優勢で、土器被覆の材質としては須恵器の鉢を利用している。蓋を伴わない1-②と蓋を伴う2-④がある。第2表5~7は香取郡多古工業団地内の遺跡で、樹枝状にのびる台地上に位置している。香取郡多古町土持台遺跡は方形区画墓とともに土器被覆の火葬墓が群をなす遺跡である(三浦1986)。方形区画墓は台地上を占有するように立地するのが特徴的で、埼玉県ではみられない墳墓である。

茨城県では、霞ヶ関周辺に土器被覆の火葬墓が

集中している。蔵骨器は須恵器製で土器被覆は須恵器鉢とする。特に集中するのは第4表の3～8で、田村・沖宿遺跡群として知られ、台地上に火葬墓群を形成する。

そのうちの土浦市尻替遺跡内では、土器被覆の火葬墓に農具が副葬されていた（吉澤 2007）。

これら3地域と埼玉県内を概観すると、土器被覆の土器は須恵器か土師器かで材質の違いがあるものの、共通した以下の特徴を指摘できる。

・8世紀後半以降の火葬墓にみられる葬法であること。

・C類、F類の日用什器を利用した蔵骨器に伴うものが多いこと。

・火葬墓または土坑墓が群集し、台地上に広く占地する遺跡に存在する傾向がある。

これをふまえると、埼玉県と同じように他地域でも土器被覆の類例が増えるのは8世紀後半以降となっており、展開期に現れる葬法のようなのである。

高級品であるB類にはほとんど伴わず、C類、F類の日用什器を蔵骨器とするものがほとんどである点は、各地域で手に入りやすい土器を使用し、対応した結果といえるのではないであろうか。

また、各地域で土器被覆の類型に偏りがあり地域性がみられるものの、埼玉県内での分類以外の組み合わせに大きく逸脱するものがないのは、やはり同じ葬法（儀礼）に基づいて火葬がなされていたことを示唆している。

そして、墳墓が群集する遺跡に存在するという点に関しては、被葬者の階層についても共通性があるようである。

第2表1に掲載している印旛郡栄町あじき台遺跡などの立地の在り方を検討した小林克は土地開発の根拠として火葬墓の造営をしたと考えている（小林 1986）。川口市吠原遺跡も同様と考えられ、香取郡多古町土持台遺跡での、台地上の方形区画墓の占地の状況もそれを思わせる。

開発に関わった人物の墓である可能性があるも

のとして土浦市尻替遺跡の農耕具が副葬されていた事例がそれを物語っている。少なくとも土地開発に関わりの深い人物が土器被覆をする火葬墓で葬られているということは、重要なヒントであるといえるだろう。

ただ、川崎市細山坂東谷遺跡のように、周辺の火葬墓の被葬者に比べて明らかに優位な立場にある例もある。土器被覆の火葬墓の被葬者が同じ階層であったとは言い切れず、南武蔵の火葬墓集中域の性格を検討する必要がある。また、同一群内での土器被覆の火葬墓のその他の墳墓の位置づけも必要であろう。

以上の通り、他地域に類例を求めて検討したが、展開期の火葬墓は葬法をどのように採用するかは、結局の所各造墓集団の性格によるところなのであろう。そして、8世紀後半以降に火葬墓の総数とバリエーションが増えるのは、火葬を受容した階層がより広がったところによるといえる。

#### まとめ

埼玉県における火葬墓は8世紀中頃には短頸壺を蔵骨器とする火葬墓が登場し、8世紀後半～9世紀前半になると火葬墓の類例は増え始め、多様性が増す。埼玉県内でもこの様な現象を見せるのは、社会の変化、造墓する階層の増加や各地域の仏教に対する理解が進んだことも関わっているのかもしれない。

今回は蔵骨器に主眼を向けたが、周辺の集落遺跡や生産遺跡、前代の古墳群についても検討することで、在地の事情を丹念に洗い出すことができのかもしれない。今後の課題としたい。

本稿を作成するにあたり、富田和夫氏・大谷徹氏から資料や遺跡情報のご教示を頂いたほか、職員の方々にアドバイスを頂くなどお世話になりました。深く感謝いたします

第4表 埼玉県の火葬場一覧

1	寺山造形出土葬骨器	本庄市寺山	D	※	不明	9世紀
2	原野河遺跡	原野市上敷丸屋敷	D	※	不明	9世紀
3	宮村遺跡	花園町永島字山1369番地ほか	D	2-②	※	9世紀後半
4	高畑出土葬骨器	行田市白川戸	G	1-①	※	9世紀
5	小井出土葬骨器	行田市小井	G	1-①	※	9世紀
7	黒山遺跡	熊谷市青山	F	1-①	※	9世紀後半
		1号火葬墓	F	1-①	※	9世紀前半
		2号火葬墓	D	2-①	※	9世紀前半
		3号火葬墓	※	2-①	※	9世紀前半
		4号火葬墓	F	※	※	9世紀
8	越前城遺跡	比企郡嵐山町大字越前平城山	C	2-①	※	9世紀後半～
7	代正寺遺跡	東松山市大字宮儀字代正寺	C	2-②	※	9世紀初頭
9	大谷出土葬骨器	東松山市大谷	C	2-①	※	8世紀後半
		東松山市大谷	D	※	※	※
9	畑中出土葬骨器	東松山市畑中	A	※	※	9世紀
10	西大岡出土葬骨器	東松山市西大岡	C	※	※	9世紀中期～後半
11	黒山出土葬骨器	比企郡嵐山町大字赤坂字黒山	A	2-①	※	8世紀中期
12	大平遺跡	比企郡嵐山町大字赤坂字大平	C	2-②	※	9世紀中頃
13	松見山遺跡	東松山市遺跡	D	2-①	※	8世紀中期～後半
14	児代遺跡	草加市岩間字児代	C	2-②	※	9世紀中頃
16	瀬戸田出土葬骨器	川越市大字有向字野新田	A	3	※	8世紀
17	平野出土葬骨器	川越市大字野崎字平野	A	2	※	9世紀中期
18	輪ヶ原遺跡出土葬骨器	大毛町野崎ヶ原	A	2	※	9世紀中期
19	松山遺跡	深土基野大字赤字平地遺山	D	2-②	※	9世紀中期～後半
20	八王子宮土器出土葬骨器	さいたま市八王子宮土器	B	2-①	※	9世紀初頭～中期
21	大久保飯家出土葬骨器	さいたま市大久保飯家遺跡	E	※	※	9世紀
22	東本郷出土葬骨器	川口市大字東本郷	A	※	※	8世紀後半～末
			E	※	※	※
			F	※	※	9世紀中頃
23	大竹末実直遺出土葬骨器	川口市大字大竹	E	※	※	9世紀中頃
24	宝泉寺遺跡	川口市大字大竹字後	F	1-②	※	9世紀前半～後半
		1号火葬墓	F	※	※	9世紀前半～後半
		2号火葬墓	F	※	※	9世紀前半～後半
		3号火葬墓	F	※	※	9世紀前半～後半
		4号火葬墓	F	※	※	9世紀前半～後半
		5号火葬墓	F	1-①	※	9世紀前半～後半
		6号火葬墓	F	※	※	9世紀前半～後半
25	大竹遺跡	川口市大字大竹字後	F	2-②	※	9世紀
26	新田出土葬骨器	川口市大字新田字新田	E	2-①	※	9世紀後半～末
27	三ツ和遺跡	鳩ヶ谷町三ツ和・八幡木	H	1-①	※	9世紀前半～中頃
		1号特殊土器	H	1-①	※	9世紀前半～中頃
		2号特殊土器	H	1-①	※	9世紀前半～中頃
		3号特殊土器	H	1-①	※	9世紀前半～中頃
		4号特殊土器	H	1-①	※	9世紀前半～中頃
28	安行市宮立ノ崎遺跡	川口市安行市宮立	F	1-①	※	9世紀前半
29	安行畑出土葬骨器	川口市安行市	D	※	※	9世紀前半
30	赤山陣屋跡遺跡	川口市赤山新田字通上	F	1-①	※	9世紀前半
		11次調査	F	※	※	9世紀前半以降
		1号火葬墓	F	※	※	9世紀後半以降
		11次調査	F	※	※	9世紀後半以降
		2号火葬墓	F	※	※	9世紀後半以降
		11次調査	F	※	※	9世紀後半以降
		3号火葬墓	F	※	※	9世紀後半以降
		11次調査	F	※	※	9世紀後半以降
		4号火葬墓	F	※	※	9世紀後半以降
		11次調査	A	4	※	9世紀前半
31	臥塚遺跡	川口市赤山	F	2-②	※	9世紀前半
		2号火葬墓	F	2-②	※	9世紀前半
		3号火葬墓	F	2-②	※	9世紀前半
		4号火葬墓	F	1-②	※	9世紀後半
		5号火葬墓	F	2-②	※	9世紀前半
		6号火葬墓	A	2-②	※	9世紀後半
		7号火葬墓	H	1-①	※	9世紀前半
		8号火葬墓	H	2-①	※	9世紀後半
		9号火葬墓	F	2-①	※	9世紀後半
		10号火葬墓	F	1-②	※	9世紀前半
		11号火葬墓	H	1-②	※	10世紀初頭
		12号火葬墓	H	※	※	9世紀後半
		13号火葬墓	H	※	※	9世紀初頭
		14号火葬墓	H	1-①	※	9世紀後半
		15号火葬墓	H	1-①	※	10世紀前後
		16号火葬墓	F	※	※	10世紀前後
		17号火葬墓	F	1-②	※	9世紀前半
		18号火葬墓	F	1-②	※	9世紀前半
		19号火葬墓	F	1-①	※	9世紀前半
		20号火葬墓	F	※	※	9世紀前半
		21号火葬墓	E	2-①	※	9世紀後半
32	末直遺跡	川口市大字安行市宮立字末直	D	2-①	※	9世紀前半
33	新立野遺土器群	川口市大字新立野字通上	F	1-①	※	9世紀前半～中頃
34	長川戸遺跡	春日部市大字長川戸字長川戸	F	2-①	※	9世紀前半
		0次1号土坑	F	2-①	※	9世紀前半
		0次1号土坑	D	2-②	※	9世紀中頃
		7次1号土坑	G?	※	※	9世紀前半
		7次0号土坑	F	1-①	※	9世紀前半

引用参考文献

- 会田 明 1990 「松山遺跡出土の蔵骨器」『研究紀要』第6号 富士見市遺跡調査会
- 石村喜英 1957 「外容器伴出の一蔵骨器について」『歴史考古』1号 日本歴史考古学会
- 岩井重雄 1976 「大久保領家出土の蔵骨器」『浦和市郷土博物館研究調査報告書』第3集 浦和市郷土博物館
- 小川順一郎 1985 『吠原遺跡（歴史時代・図版編）』川口市文化財調査報告第7集 川口市遺跡調査会
- 小田祐樹 2011 「墓構造の比較からみた古代火葬墓の造営背景 - 畿内と北部九州を対象として - 」  
『日本考古学』第32号 日本考古学協会
- 春日 肇 2000 「埼玉県南東部における古代火葬墓について」『埼玉考古』第35号 埼玉考古学会
- 金井塚良一編 1978 『北武蔵考古学資料図鑑』 校倉書房
- 金井塚厚志 1994 『埋蔵文化財の調査2：鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第16集 鳩ヶ谷市教育委員会
- 金箱文夫 他 1989 『赤山』本文編・第2分冊 川口市文化財調査報告第12集 川口市遺跡調査会
- 川口市 1986 『川口市史』考古編
- 北山峰生 2008 「古代火葬墓の導入事情」『ヒストリア』大阪歴史学会
- 栗原文蔵 1966 「須恵器利用の蔵骨器二題」『埼玉考古』第4号 埼玉考古学会
- 黒沼和彦 1990 『鳩ヶ谷市三ツ和遺跡』鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第4集 鳩ヶ谷市教育委員会
- 小林 克 1986 「平安時代火葬墓の性格とその背景」『史叢』第37号 日本大学史学会
- 小林義孝 1999 「古代墳墓研究の分析視覚」『古代文化』51-12 古代学協会
- 小林義孝 2001 「火葬墓はどのように受容され、在地化したか - 関東地方の石櫃をもつ火葬墓を例に - 」  
『地域考古学の展開』村田文夫先生選啓記念論文集刊行会
- 小峰啓太郎 1957 「東松山地方の須恵器蔵骨器」『台地』6号 台地研究会
- 小野義信 1979 『越畑城跡』埼玉県遺跡発掘調査報告第20集 埼玉県教育委員会
- 鈴木孝之 1991 『大正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集  
埼玉県立歴史資料館 1988 『也加多』
- 山口哲也 他 2005 『赤山陣屋跡遺跡』川口市文化財調査報告第30週 川口市遺跡調査会
- 高崎光司 1991 『児沢北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第104集
- 田中広明 2012 『皿沼西／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第391集
- 戸田有二 1987 『坂東谷遺跡』坂東谷遺跡発掘調査団
- 出縄康行 1997 『大里村南部遺跡群Ⅰ』大里村教育委員会
- 中野達也 他 2002 『浜川戸遺跡5, 6, 7, 24, 25, 26次』春日部市埋蔵文化財調査報告書第11集  
春日部市教育委員会
- 中野達也 他 2005 『浜川戸遺跡1, 2, 3, 4次調査地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第13集  
春日部市教育委員会
- 並木 隆 1979 『吉岡・東本郷台・上一斗薪遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第37集 埼玉県遺跡調査会
- 秦野昌明 1981 「与野市八王子出土の蔵骨器について」『与野考古学調査報告書』第10集 与野市教育委員会
- 東日本埋蔵文化財研究会 1995 『東日本における奈良・平安時代の墓制』
- 三浦和信 1986 『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書 - 林小原台・果根・土持台・林中ノ台・吹入台 - 』  
千葉県文化財センター報告書第102集
- 宮井英一 1985 『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
- 古澤 悟 他 2007 『尻替遺跡』田村・中宿土地計画整理事業に伴う発掘調査報告書第10集 土浦市教育委員会
- 渡辺 一 1986 「吠原遺跡火葬墓群の検討」『吠原遺跡（考察編）』川口市教育委員会
- 渡辺 一 2006 『窯業工人と墓』『鳩山の歴史』鳩山町



**研究紀要** 第29号

2015

平成27年3月25日 印刷

平成27年3月31日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 巧和工藝印刷株式会社